令和４年度の研究（または活動）内容

地域の共創様態を創発することを目的とした前年度「宮城県域の地技と資源を活かした小さな多世代コアトリエの創発実践」に対し、実際に「場づくり」を進めるための研究として、地技の再評価につながる生業場およびコモンプレイスの連携・創出についての実践的研究を進めることとした。生業景デザイン研究所に寄せられた相談情報を活かし、これに呼応しつつ、研究や制作実践の可能性を、参画学生とともに探った。主な活動経過を以下に記す。

⑴ 石巻雄勝（協力＝菅原玲・阿部正・大沼正寛）

前年度にまとめた石盤葺ハンドブック（著者＝佐々木信平・大沼正寛・阿部正）が翌年度も増刷することとなり、石産業の再興に向けて小さな一助とすることを目的として動いている一連の活動に寄与することができた。東日本大震災後の復興支援等において協力してきた経緯、復興期間を経て急速に支援活動が減退した現況を受けて、2023 年 2 月 2 日に、石巻市と東北工業大学とのあいだで包括連携協定を締結することとなったが、当研究所の活動は、このことにも関係を有しているといえよう。もちろん協定は今後の活動を活性化するものであり、当研究所の協力事項として、近く予定されている国内重要文化財建造物の屋根工事における雄勝産天然スレート材の利用促進に関する動きが検討されることとなった。

なお、このことと関連して、2022 年 10 月に文房四宝展参加、12 月に東北工業大学一番町ロビーにて同町との連携事業紹介展（硯彫の実演、販売会実施）、2023 年 2 月～3 月に同一番町ロビー　にて雄勝硯生産販売協同組合も交えた宮城の地場産品産地紹介展、などが行われたことを付記する。

次年度も、硯上の里おがつ運営協議会との今後の道の駅の方向性検討などを予定しており、研究所としても協力できる面があれば参画していきたい。

⑵ 石盤葺技能講習（協力＝阿部正・大沼正寛）

2023 年 1 月 13 日に、信玄石盤工房と登米市教育委員会の共催により、とよま伝統芸能伝承館（森舞台）で行われた。参加者は少なめであったが、登米で建設業を営む方たちで、固有の建築造形に少しずつ関心が向けられつつあることを確認した。

⑶ 登米市町屋ミュージアム菅勘資料館の利活用（協力＝宮本愛・中村琢己）

コーディネート業務としては、宮本が事務局長を務める認定 NPO 法人つながりデザインセンターが担当しており、2023 年 3 月にアート WS 開催に協力している。登米市における町家建築の調査は、これまで多くの研究が重ねられてきたが、近年は中村琢己・東北工業大学建築学部建築学科建築史研究室が調査研究を続けてきており、文化財等建造物の調査・保存・活用が連動しつつある状況をみることができる。とくに当研究所としては、活用面において参照すべき点もあり、情報共有を行っている。

⑷ 秋田・ORAe 展示会（協力＝菅原香織）

2023 年 3 月 11 日～19 日まで、掲題企画の準備・運営に協力を行った。県内の 30 事業者と秋田公

立美術大学の学生とのコラボ作品も含めた展示販売会で、ものづくりの作り手と使い手をつなぐプラットフォームづくりに取り組んでいる今中教授の研究協力として、工芸部門のディレクションを菅原が担当した。来年度に向けては、八郎潟・八郎湖流域の地域資源を活用したエコミュージアム「潟の博物館」構想研究を各種研究助成金に申請している。

⑸ 東北の干場の生業景調査（担当＝大沼正寛、研究室大学院生・吉田陽菜子ら）

これまでの「とうほく地技カタログ＆マップ」の振り返り・総括をするなかで、地域の資源・環境を活かした生業景の顕著な事例として、寒冷な東北の気候風土を活かした「寒風の干場」は好例であるとの見解に達し、本件に関心を寄せる大学院生の修士研修を軸とした調査研究を展開することとなった。

10 月には秋田のいぶりがっこ現場、12 月には新潟村上の鮭、1 月には丸森町のへそ大根のほか、比較対象として岐阜の凍み大根、さらに 3 月には岩手県西和賀の凍み大根について、その生業場の設え、生業景、これまでの経緯、今後の課題等を伺うことができた。日々、そして毎年微妙に異なる気候風土のなかで、状況に応じて一期一会の対応、調整を重ねて目的の品質、味わいを生み出そうとするとき、その生業場の構成要素は、所有者自身が調整、改変を重ねることとなり、このことは「真正性ある生業景」の形成に、大いに寄与しているであろうことが示唆された。

⑹ 浦戸諸島の神社と集落（担当＝中村琢己）

高台で被災を免れた神社建築と境内環境。浜の民家がつくる希少な町並みの調査研究に着手しており、暮らしや民俗なども視野に入れた評価の可能性もあるため、分野横断協力を模索している。

⑺ 登米市直売所（報告＝佐々木悠里）

登米市物産直売所は、登米市の仙台学寮（閉寮済）と併設しており、老朽化により取り壊すことが決定したため 3/21 で閉店となる。ただ、取り壊しの日程やその後のことがまだ決定しておらず、4 月上旬ごろより登米市米山町のK園芸が夏ごろまでの期限付きで出店する予定となっている。直売所は野菜はもちろんのこと、油麩や味噌等の加工品や木工芸品等も扱っており、登米市の PR の場や販売の一拠点となっている。北仙台・台原近辺の地域住民からの需要もあり、存続を望む声が多数寄せられている。現在納品している生産者からも、存続や同じような販売場所を求める声が寄せられている。生産現場そのものだけを生業場と考えるのではなく、需要やネットワーク・流通などを併せ考えた生業景の考え方をどのように概念整理するかも突きつけられている事例と考えることができよう。

⑻ 仙台市若林区井土地区の地域資源（協力＝田澤紘子、向井康夫）

現在の井土地区には、世代を超えて継承していかなければならない「魅力」も「課題」もあるとして、「継続的に通うための仕掛け」と「地域資源を特別なものとして楽しむ場面の創出」によって、井土住民にとって「井土に再び集い合う」という状況を当たり前のものにするための取り組みを実践している。そこで、①多世代が集まれる場づくり（「プチ井土マルシェ」の開催）、②固有の資源を内外に発信するための魅力づくり（「井土自然環境学習会」の開催）、③ふるさとに通うきっかけづくり（「井土クリーン作戦」の開催）、に今年度は取り組んだ。

⑼ 南三陸町入谷ひころの里の植物調査結果の発表と今後の管理方法（担当＝阿部正・向井康夫）

同施設の指定管理を務める阿部が主催し、調査は向井が担当した。またその後、報告会をひころの里で行った（2023 年 3 月 12 日）。都市公園における野草種との比較は興味深く、地区住民が里山の

自然環境に関心を寄せる機会となった。なお、山野草調査の際、地区の婦人からセンブリ茶を進められ、強烈な苦みを有しながら古い伝えのある意味、効用、さらにジェラートのような現代的活用法にも考察を寄せることとなった。

(10) 柴田町・城址公園一帯の現有資源を活かした街並み整備（協力＝佐々木秀之・佐藤飛鳥）

茶室や伊達政宗騎馬像の石膏など、現代の高度経済成長の遺産をどのように現在に活かすか、事業申請が通ったことから、これから取り組みを進めていく。またこれに関連して、柴田町を中心とする県南地域の観光（ガーデンツーリズム）に着手している。まずは地域資源の洗い出しとビジョン作成を念頭に、国交省事業に申請している。

(11) 富谷市立図書館基本設計プロポーザル（協力＝大沼正寛・渡邉武海・宮本愛・高橋直子）

宮城県美術館佐藤忠良記念館を手がけた大宇根建築設計事務所とともに、富谷市民図書館等複合施設基本設計プロポーザルに挑戦した。基本コンセプトを「融合のグランドテーブル」とし、知・味・育の活動を共にはぐくむ家族の大きなテーブルのような場の構築を目指した。